

大腸がん検診（職域）

動 向

大腸がんは、近年日本人に増加傾向が顕著ながんの一つで、その発生場所はS字結腸と直腸に集中している。

数年来検診の有効性が理解されて普及がすすみ、受診者は増加傾向にある。平成18年度の職域における受診者数は、昨年度より871名増加し、57,748名となった。

当協会の大腸がん検診は、一次スクリーニングに免疫学的便潜血反応検査2回法と自覚症状を主とする問診を、また精密検査として内視鏡検査と大腸X線撮影を併用する方式を採用。診断精度の高い効果的なシステムを構築し運用してきたが、18年度以降精密検査については、原則として信頼のおける外部の専門機関を紹介する方法に切り替えた。

その結果、18年度の大腸精密検査の実施状況は表4に示すように、当協会における精密検査受診率は25.8%から6.7%に減少した。

大腸がんは、早期発見により治癒可能ながんであり、今後とも事業所の健康管理担当者に対し、定期検診の重要性を喚起していきたい。

方 法

大腸がん検診のスクリーニングは、免疫学的便潜血反応検査による便の検査を二日間連続して提出する二日法と問診票からのチェックで対象者を選別している。

精密検査の内容は全大腸内視鏡検査と大腸造影検査の併用法で実施している。併用法の特徴は1回の前処置で二つの検査が可能であること、もう一つは大腸内視鏡検査と大腸造影検査のそれぞれの欠点をお互いに補完しあい欠点を少なく出来ることである。

結 果

平成18年度の職域大腸がん検診の実施数は表1に示すように57,748人で、そのうち男39,486人、女18,262人である。前年度より男性がやや増加している。

検体提出数は表2に示すように検体不適は無いが2日間採取し提出したのは47,048人で残り10,700人は1日のみ提出であった。このうち便潜血反応検査で陽性を示した人は6.3%、問診票からチェックされた人は0.5%。便潜血反応検査の陽性者の内訳は2日間連続(+)(+)が639人であった。

当施設で実施する精密検査の対象者（表3・Aグループ）は24,986人で、男16,897人、女8,089人で要精密検査は6.4%の1,594人である。その内訳は1,483人が便潜血陽性で、111人は問診票からである。実際に精密検査を受診したのは、男69人、女38人合計107人で外部紹介のため要精密検査者に対して6.7%の低率である。ここから発見された疾患は大腸がん2人、大腸ポリープ47人、結腸憩室42人、内痔核が21人である。

表5に示す結果から見た発見疾患は(+)(+)の二日間陽性者からの発見大腸がんは1人5.6%を示し、1回(+)からも1人がんが発見されている。同様に大腸ポリープでも便潜血反応1回陽性からは44.4%、2回陽性の場合には更に発見度が高く55.6%を示す。

便潜血反応検査陽性から大腸ポリープが発見され陰性からは、がんもポリープも発見されていない。

これらの事から大腸がん検診で注意しなければならないことは1回でも便潜血陽性になったら、必ず受診を勧めることである。

大腸がん検診の重要性を更に周知させ、便潜血陽性者に対する受診者への十分な説明と理解を求め精密検査の受診率を向上させていく必要がある。

関係の集計表は76頁に掲載